



Tokyo Gakugei University Repository

東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	学校教育における情報リテラシー育成の必要性：東京学芸大学附属小金井小学校の図書館利用教育の実践例(fulltext)
Author(s)	菅原, 春雄; 中山, 美由紀
Citation	文教大学教育学部紀要, 41: 107-115
Issue Date	2007-12-20
URL	http://hdl.handle.net/2309/105688
Publisher	文教大学
Rights	

学校教育における情報リテラシー育成の必要性 —東京学芸大学附属小金井小学校の図書館利用教育の実践例—

菅原 春雄*・中山 美由紀**

The Need of Information Literacy Training in School Education: A Case Study of Library Instruction at Koganei Elementary School of Tokyo Gakuei University

Haruo SUGAWARA, Miyuki NAKAYAMA

要旨 この小論は学校教育において情報リテラシーを育成する事の必要性和 2004 年から 2007 年 7 月にかけて行った東京学芸大学附属小金井小学校図書館における「図書の日」および教科・領域とかかわって行った図書館利用教育を情報リテラシー育成の一端として行った実践を紹介したものである。「図書の日」における図書館利用の習慣化、国語の教科書に題材としてでている図書館利用指導について、低学年における分類、配架、請求記号の読み取り、小学 3 年生の校外学習や国語科と連動した図鑑指導とパスファインダーの提示、小学 4 年生の分類演習活動を取り入れた日本十進分類法（NDC）の指導、日常活動における情報リテラシーの示唆の事例をあげた。学校教育から生涯教育へ移行するために、課題解決のプロセスを学ぶ、学び方の学習すなわち情報リテラシーの育成が小学校の指導として可能であり、また欠かせないことを強調した。

キーワード：情報リテラシー 図書館利用教育 学習指導要領 情報活用能力 パスファインダー

1. はじめに

現行の学習指導要領が 2000 年より弾力的に、正規には 2002 年より施行され、その特色として調べ学習や総合的な学習の時間が盛り込まれているが、早期からその見直しが話題となっていた。文部科学省は 2007 年 8 月 30 日に小学校の、31 日に中学校の総合的な学習の時間の削減を含む学習指導要領改訂に向けた「検討素案」を中央教育審議会教育課程部会に示した^{*1}。本来、総合的な学習の時間は課題を見つけ、解決する能力を子どもたちに身につけさせる事を目的としているが、各教師がその対応にスムーズに適応してきただろうかとの疑問を筆者は禁じえない。以前からの学習指導要領の各教科・領域において「学校図書館

の活用」が記されていても、本当に図書館メディアを活用して授業を進められているだろうか。また子どもたちの疑問や問題解決に図書館資料を活用した授業が進められているのだろうか。2003 年 4 月から 12 学級以上の学校には司書教諭を置かなければならないとする学校図書館法の改正がおこなわれたが、学校図書館は学校教育の中で役割を果たしているのだろうか。この小論では、小学校図書館の図書館利用教育の実践を通じて、学校での情報リテラシーをの必要性を考察する。

情報リテラシーとは「さまざまな情報行動を通じて情報を獲得し、それを知識に組み込んで問題を解決し目標を達成する。そのための情報スキル」^{*2}と三輪真木子氏は定義しているが、その概念は 1986 年の臨時教育審議会第二次答申の中で位置づけられた「情報活用能力」に対応している。文部科学省はその情報活用能力の育成を情報教育の目標として、「情報活用の実践力」「情報の科学的

*すがわら はるお 文教大学教育学部教職課程

**なかやま みゆき 東京学芸大学附属小金井小学校司書（鶴見大学非常勤講師）

な理解」「情報社会に参画する態度」と整理³しているが、コンピュータやネットワークの活用を奨励したICT⁴に力点が置かれた狭義のものとなっている。しかし図書館情報学の立場からすればICT関連の情報だけでは片手落ちであり、従来からある図書資料をはじめとする様々なメディアの情報活用も取り入れなければ、真の情報活用の能力の育成は図れない。既に行われてきたライブラリー・リテラシーの育成すなわち「図書館利用教育」も情報教育の一端を担うものと考え、図書館資料による情報探索のツールやスキルを学ぶ事は、ICT情報も含めたその他のメディアを使いこなす基礎となるのである。

本論での「情報リテラシー」は学校で扱うコンピュータ・リテラシーとライブラリー・リテラシーの二つであるとし、後者の図書館利用教育の必要性を東京学芸大学附属小金井小学校での2004年から2007年7月までの実践から示す。

2. 学校及び学校図書館の概要

東京学芸大学附属小金井小学校は国立法人東京学芸大学の4校ある附属小学校の中の1校で大学キャンパス内にあり、全校24学級、児童数約940名、教職員約50名の大規模校である。

学校図書館は、1階昇降口の前にある職員室の並びにある二教室分のオープンルームで、児童・教職員の通り道になっており、休み時間や放課後も常に利用者がある。担当は学級担任・研究主任である司書教諭1名と筆者である専任の司書2名で、視聴覚やコンピュータを扱う情報部に属している。司書は小・中高(国語)教員免許、司書・司書教諭資格を持ち、本校では司書教諭同様に指導を行っている。

蔵書は約17000冊。雑誌は4誌。他に朝日小学生新聞がある。紙芝居が15冊。教材ビデオが145本。そのほか書籍の付録であるCDやDVDを52本別置している。

蔵書のデータベース化は1999年9月に完了し、

現在は富士通のスクールリブ(Ver.3)を使用。書誌データはTRCMARCをTOOL-ISを通じてダウンロードしている。インターネットにつながるコンピュータは10台、コピー可能なプリンター1台があり、校内LANに接続している。

3. 「図書の時間」で利用の習慣化

本校では週に1時間、各学級に割り当てられた図書館優先利用時間がある。通称「図書の時間」と呼ばれ主に国語の時数としてカウントされ、担任と司書とで指導している。

始めの10分から15分は司書が読み聞かせか、図書案内をしている。時には学年に応じた基本の絵本や児童書、季節や時の話題に合わせた作品、教室での学習内容に合わせた作品などから本を選ぶ。その後児童が本を返却した後「1人1冊、黙って読む」というサイレント・リーディングの時間を取り、最後の5分に貸出をする。必要に応じて利用指導を行う。毎週の「図書の時間」は、本と親しみ、読む習慣と力をつけるための読書の時間であるとともに、図書館利用の習慣化を図ることもねらいがある。いざ情報の探索となった時に、百科事典や図鑑がどこにあるか、虫や野菜の本、環境や歴史の本がどこにあるか、慣れ親しんでいる空間であれば子どもたちの動きは早い。一度学校でライブラリー・リテラシーを身につければ、公立図書館でも、進学した学校でも応用が効く。図書館利用の習慣化は情報リテラシーの一步となっている。

4. 教科書と図書館利用指導

学習指導要領の学校図書館に関する記述は改訂ごとに増えてきている⁵。課題解決のプロセスをたどる活動は、様々な教科の単元や題材に入ってきており、教科書にも「図書館で調べよう。」という記述が多くでてくる⁶。全国学校図書館協議会の「情報・メディアを使った学び方指導体系表」

(2004)をもとに各学年・各教科の単元計画を授業者と図書館担当者ですりあわせていくことによって図書館利用指導の機会が生まれる。

本校で使用の教科書『ひろがる言葉 小学国語』（教育出版 2005）の上巻には、次のような図書館利用の題材が7月に設定されている。

2年《図書室へ行こう》本をさがそう

ラベルと書架の関係

3年《目次をひらこう》図鑑の利用

目次と索引

4年《「じょうほうけいじ板」を作ろう》

日本十進分類法のしくみ

本校図書館では教員とティーム・ティーチング又は、単独でこれらの図書館利用指導を行い、夏休みの公立図書館の利用を促している。以下、この教科書に基づいた上記の事例を挙げる。

5. 2年生「本をさがそう」

説明文「すみれとあり」と「とりのちえ」間に、「あり」の本や「とり」の本を学校図書館で探す事例が紹介されている。

これを受けて、2年生全員には「4類自然科学」の中でも特に「47」のラベルの記号が植物、「48」のラベルの記号が動物であることを案内した。ラベルの1段目の数字の記号、特に始まりの数字（類）を意識させた。発展学習として他の植物や動物の本を読んでみようという活動があり、個々にはレファレンスを行うが、クラスによっては図鑑の目次・索引の引き方を簡単に指導する。「アジサイの仲間が出ているページはどこですか?」、「アリの仲間にはなんという名前のアリがいますか?」など質問しながら、『花』と『昆虫』の図鑑それぞれ5冊の複本を使い、班活動として確認させることができた。

2学期には、説明文「さけが大きくなるまで」読んだ後には「生きものふしぎ図かん」を作成するが、館内の4類と「47植物」「48動物」「46生物一般」の資料とその所在を1学期に学習した

〈経験〉が子どもたちの助けとなっている。

学年としては2学年ではラベルの請求記号への意識づけだけを必修とし、3学年で図鑑指導を、必修としている。2学期や3学期にも「4類を借りた人は手を上げて?」「持っている本の記号は何がついている?」など、時折借りた本の請求記号を意識させ、強化している。

6. 3年生「磯の生き物の調べ学習をめぐって」

本校では毎年6月下旬に3年生が2泊3日で臨海の宿泊学習を行っている⁷⁾。事前に磯観察のための調べる学習を行うため、2005年から最初に図鑑の目次と索引について指導を行うようにした。総合的な学習の時間に国語のカリキュラムにある7月の指導事項を前倒した形となっている。

6.1 目次と索引—図鑑指導

まず担任が子どもたちに、教科書⁸⁾を読みながら目次と索引を説明、目次は仲間毎にページ順、索引は名前や言葉がアイウエオ順になっているとまとめをする。その後、司書が図鑑の説明をし、演習問題のあるワークシートを配布して、子どもたちは班ごとの演習をした。

[演習問題の例]

* 「まき貝のなかま」の「タマキビ（ガイ）」が、でているページをさがしましょう。

* 「ヒトデ」のなかまの名まえを3つ書いてみましょう。

* 「カニ」の おすと めすの ちがいはどこをみればわかりますか?

* 「ヤドカリ」のひっこしのせつめいがでているページをさがしましょう。

* 「(ホン) ヤドカリ」のからだの大きさは?

* 「潮干帯」または「タイドプール」の説明がでているページをさがして、読みましょう。また、絵をかいて、説明してみましょう。

子どもたちはクイズに答える感覚で張り切って

調べ、担任と司書は各班をまわって支援を行った。図鑑の前には「この本の使い方」(凡例)があり、後ろには、とっておき情報(専門用語の解説や採集、観察、飼い方、道具一覧、危険な動物など)がまとまっていると紹介し、確認した。

6.2 資料収集と探索

2004年は所蔵の資料が1/4と個人利用で借りた公共図書館の資料3/4で100冊程度をそろえたが、3年かけて蔵書を増やし2006年には自校の蔵書でほぼ賄えるようになった。現在は新刊チェックをするだけで足りる。また図鑑10冊を利用指導のために購入もした。利用1番目のクラスが館内から抜き出し、利用最後のクラスがラベルを見ながら、棚に戻す作業を行った。

ブックリストは特に不要との意見を教員からもらっていたが、2007年は図書便りの号外としてパスファインダー(あるテーマを調べるために役立つ資料をわかりやすく示した1枚のチラシ)をつくって配布し、児童の総合のファイルにとじてもらった。公共図書館に行った時、家庭でのインターネット検索時に「探し方の案内」ともなるように作成した。(詳細は8.3参照)

動機づけとして『しおだまりのいきもの』(富田百秋 福音館書店 1995)、『いそでみつけた』(吉崎正巳 福音館書店 1999)の2冊を読み聞かせし、これらの本は現在は売られていないこと、そういう本を読みたければ町の図書館(公共図書館)に聞いてみることを伝え、図書館の役割を案内した。

教室での探索、まとめ、発表の過程は各担任が指導をする。司書は他の学年の図書の時間もあるので、空いた時間と3年生の活動があればチーム・ティーチングとして教室に入り、個々のレファレンス相談に応じたり、支援を行った。どの本で調べたかわかるように最低限、書名は記録するよう伝えている。

6.3 Webサイトの閲覧

2004年は図書館と3年生の担任との連絡が不十分で、家庭でネットを使ったことがあると自負する子どもたちが突然館内のコンピュータを使いに来てきた。しかしレベルはさまざまで、検索に入れるキーワードも、実は入力の方法もわからないまま、目的のwebサイトに到達できずにずっとマウスをいじっている子も多かった。家庭での環境の違いもあったろう、学校での利用にはやはり一斉指導が必要である。検索方法を指導する時間はないので、次の時間には国立科学博物館の磯観察のバーチャルミュージアムのアドレスを示し、最初からここを見よと限定した。そうでないと本で調べている子どもたちの対応が全くできなくなってしまったからだ。適したwebサイトにたどりつくことに時間をかけるより、3年生のこの時間では情報の内容を読み取るの方が重要である。検索キーワードの入れ方や情報の選択、評価は高学年で別に設けるのがよいと判断した。3年生では、webサイトに慣れ、紹介するリンク先をクリックするという体験だけで十分である。その後は、資料が充実し、資料探索の指導をするにともなって、3年生がコンピュータに向かうことがなくなっていった。やはり小学生ははじめに図書資料の探索と読解から基礎を作っていかなければならないと感じている。

6.4 教員の評価

2005年に3年担任教諭からもらった評価は以下の通りであった。

反省点

- ・演習問題はもう少し精選が必要。
- ・ラベルの記号や出版社の記入は不要。(ゆっくり書いている時間がない。)
- ・図鑑の数が2人に1冊くらいが理想。
- ・ハンディタイプの図鑑やビデオなどの映像資料も希望。

よかった点

- ・資料は量的に40人に対応できた。
- ・移動可能なブックトラックで学年預けが便利

だった。

- ・国語の指導事項と連動して、図書館専門職から最初に図鑑の利用指導を受けられたこと。

資料の量的・質的な評価が主であり、児童の探索行動、探索スキルに対する指摘は最後の一点である。しかし図書館との協働で授業を進めたことに対する効果を認めている。

7. 4年生 「100冊図書館をつくらう！」—日本十進分類法（NDC）のしくみ

4年生の説明文「花を見つける手がかり」と「トンボの楽園づくり」の間に、昆虫についての疑問を調べて知らせ合う活動がある。その中で図書館利用のスキルとしてNDCが紹介され、いわゆる「情報カード」の書き方の説明もある*9。本校では1学期末の図書の時間2時間を使い、NDCの学習を行う。第1次で司書がNDCとは何かの説明をした後、第2次で子どもたちが班毎に分類演習を行う活動を2005年から始めている。

導入は個人の家の本棚と図書館の本棚の違いを考えてもらうことから始める。個人の持つ本の冊数より図書館のほうが圧倒的に多いので、本を並べるには決まりが必要なことを理解させる。そのために、次のような記号を使って説明をする。

例)

△○×◇▼◎◎●▲▲○◎■×▼△□◇

「△はどこにいくつありますか？」

「どうやって探しましたか？」

「次のように（下段参照）ならべるとなにかがいますか？」

○○◎◎◎●××△△▲▼▼□■◇◇

図書館は大きく10の仲間に分けていること、その中の1つがさらに10に分けられ、その中の1つもさらに細かく10に分けられていることを教える。このしくみが「日本十進分類法」という分類になっていることを説明する。小学生ではいちばん大きな10の仲間分け（類）がわかれば合

格と、実際に代表的な本を見せながら「類」の説明をする。0類ならば『ギネスブック』（ポプラ社）や『どの本、読もうかな？』（国土社）『朝日ジュニア百科年鑑』（朝日新聞社）など、子どもたちが知っている本や知っていてほしい本を見せる。ひととおり説明し終わったら、類の名前と内容を線で結ぶ確認問題をやり、黒板で答え合わせをする。第2次は「100冊図書館をみなさんの手で作ってもらいましょう。」と子どもたちに目標を示し、実際に分類をさせる。各班にラベルを隠した10冊の本（0類から9類まで各1冊ずつ）と類の名前をつけた洗濯ばさみを配り、班で話し合いながら分類をしてもらう*10。出来上がったら、前に持ち寄って類ごとに並べ、全体で答え合わせをしていって、おかしいところはその班がやり直しをする。答えが全部出たところで、100冊図書館の完成である。

子どもたちに、「振り返り」を書いてもらったところ、100冊は意外に少なく感じたようだった。「むずかしいけどおもしろかった。」「本をいいかげんにかえしてはいけないことがわかった。」「本がさがしやすくなる。」「図書館のしくみがわかった。」「こんど町の図書館でも、「類」を見てみたいと思います。」「これからはコンピューターでけんさくしなくてもさがせるな。」というものだった。図書館のラベルの記号の意味を知り、それが本を探す手立てとなること、だからいい加減に適当な棚に返してはいけないことなど、毎年オリエンテーションでも確認している事項である。しかし子どもたちが分類するという活動を通して、その意味に改めて気づき、「NDCのしくみ」さらには「図書館のしくみ」を理解したということが、分類演習の授業を行った最大の効果であるといえる。

8. 日常からの図書館リテラシー育成

1年生には図書の扱い方、館内マナーなどをはじめに教えて、「本に親しむ、図書館利用に慣れ

る」ことを図る。高学年の百科事典や年鑑などの利用教育や調べ学習の進め方などは、オリエンテーションとして説明したり、出版社のゲストを呼んで話をしてもらったりしているが、本格的にはまだ取り組めてはいない。

そのような状況でも図書の時間の取り組みとして、はじめの10分や終わりのまとめの時間に行っている図書館利用教育のいくつかの事例を紹介する。

8.1 絵本から図鑑へ（1年生）

『とべバツ』(田島征三, 偕成社, 1988) は、びくびくしていたバツが「勇気」「決意」「行動」を見せる、力強いダイナミックな絵本で、子どもたちに人気がある。大型で遠目もきくので必ず1年生で読み聞かせをする。読み終わった後に、最近「バツって飛ぶの?」という子どもが現れはじめた。そこで、フレーベル館の図鑑ナチュレの『こんちゅう』で、バツの飛ぶページを見せ、「虫について知りたいことがあったら、図鑑という調べる本があるのだよ。」ということを紹介している。後で3年生で勉強することだがと予告をしてはじめて目次、後ろに索引があって、何ページをみればよいかかわかるようになっていくということも参考として言い添えている。

8.2 読み比べる（2年生）

春、進級した2年生には『たんぼぼ』という以下の2冊絵本を2週続けて読み聞かせをし、気づいたことを発表させている。

*『たんぼぼ』平山和子 福音館書店 1972

*『たんぼぼ』甲斐伸江 金の星社 1984

前者は科学的な説明の本で、縦長にページが折り込まれた根っこの絵がある。後者は擬人法を使って叙情的にタンポポの生態を表現、綿毛が飛ぶ様子の横長折込ページがある。

同じテーマで違う本を読み比べをすると、同じ内容でも違う表現の仕方をしていくことや一方にしか書いていないことなどに気づく。これから先

もなにかを調べようと思ったら1冊で終わりにしないで、何冊か読み比べるとよいと伝えている。

8.3 パスファインダーとリスト（3・4年生）

磯の生物調べに、2007年は図書だよりの号外として「パスファインダー」をつくり配布した。校外学習「至楽（しらく）荘」ファイルにとじ込んで、活用してもらった。図鑑指導後の案内として作成した構成は以下の通りである。

☆生き物をよく見よう！

・・・（4類をみよう！）

☆観察しよう！採ってみよう！

・・・（6類もみよう！）

☆磯で遊ぼう！海と遊ぼう！

・・・（7類にもあるよ）

☆読み聞かせした本（品切れ本）

・・・（町の図書館でさがそう）

☆インターネットでみてみよう！

・・・公的施設からの情報

国立科学博物館のバーチャルミュージアム

<http://www.kahaku.go.jp/exhibitions/vm/iso/index.html>

千葉県立中央博物館分館海の博物館

<http://www.chiba-muse.or.jp/UMIHAKU/index.htm>

福井県海浜自然センター

<http://www.fcnc.jp/go/go.html>

4類、6類、7類を見ようとキーワードをつけて、それぞれ新規購入本や評価の高いものを3冊ずつ表紙と請求記号をつけて紹介した。web情報にはヒットしやすい「キーワード」を案内し、興味を持ったところから資料に当たれるよう「探し方」を案内した。

4年生以上は山の校外施設「一字（いちう）荘」があって、これも毎年テーマを決めて事前学習をし、後で現地調査をする。テーマは樹、鳥、水、きのこ、植物、岩石、昆虫、土など多岐に亘っている。2007年から調べる活動で使った資料を後輩や友だちに伝えようという、資料案内を書かせる活動を始めた。

・あなたのテーマ

- ・使って一番よかった資料
- ・おすすめの言葉

今後、テーマ別に編集すれば、自前の資料案内リストとなる予定である。今年度はこの活動を通して資料を使うことを子どもたちに振り返らせることができた。ファイルにとじ込み、学校図書館内に置いて公開するのはこれからである。来年度はこのファイルを使って子どもたちが資料のあたりをつけることも可能となる。

8.4 情報の切り取り（4年生以上）

2006年、11月モンゴルの教育視察団が本校を見学しに来た。4年生図書の時間の読み聞かせをみてもらったが、『いしになったかりゅうど』（大塚勇三再話 赤羽末吉画 福音館書店 1970）を行い、『世界のこどもたち 世界をむすぶぼくの声 わたしの声』（ユニセフ企画 バーナバス・キングスリー／アナベル・キングスリー編 ほるぷ出版 1995）の本から、モンゴルの子どもの服装や住まい（ゲル）を紹介した。子どもたちは、ゲストにいろいろ質問をしたが、ウランバートル郊外に石なったお母さんの伝説が残る話があり、その石もあると教えてもらった。

次の図書の時間には『世界の子どもたち』から、モンゴル（p50.51）、韓国（p54.55）を紹介。民族衣装を着ている子どもたちの写真から、日本のページがどうなっているかを予測させた。「お正月の着物かな。」「七五三の袴だよ。」という期待が返ってくる。

日本（p52.53）を開けると、ジャージをはいた小学生の兄と赤い吊りスカートをはいた妹が、黄色いつば付帽子をかぶりランドセルを背負った写真がでてくる。靴下は履いていない。「えーっ！！」と落胆の声があがる。

また、アジアの各国子どもが何人も並んでいる写真（p46.47）の中では、日本の子どもがどこにいるかを探させると、左端に指で眼鏡を作り片足を上げた男の子をみつける。他の国の子どもたちがカッコよく、あるいはきちんと立っている姿の

中では「おちゃめなおどけもの」というイメージであり、これもがっかりの声があがっていた。

写真の子どもは日本人の1人には違いないけど、日本の子ども全部が「おちゃめな」のではなく、今回は掲載された子どもがそういう子どもだったということだ。情報は切り取られて、編集されていることを、読み解く時に気をつけるよう注意を促しまとめとした。今後は、なぜがっかりしたのか、その理由を話し合う必要があると考えている。

8.5 絵を読み解く（字のない絵本）

いくつか字のない絵本の傑作はある。低学年から読みきかせをしていると、ページをめくるだけの字のない絵本でも子どもたちは自然に物語の世界に入り込んでいく。今までも2年生には『かさ』（太田大八 文研出版 1995）などを見せてきたが、2007年は「絵を読み解く」という新しい読解力を意識して、ガブリエル・バンサンの『アンジュール—ある犬の物語』（BL出版 1986）を3年生に、ピラミッドを見たいという少年憧れと行動を描いた『ナビル』（BL出版 2000）を5,6年生に見せた。『ナビル』には少年のひとこと、ふたこと言葉が添えられているが、ほとんど絵の展開でストーリーが明らかになっていく。おしゃべりをする子どもはいない。めくるページの絵を真剣に見つめていく。終わったあとに印象に残った場面を発表させ、それぞれの子が受け取ったものを交流させる。公共図書館の児童サービスでは感想は聞かない事が原則とされるが、学校では日常的に「思ったこと」「わかったこと」を「表現し」て、コミュニケーションを図り、様々な機会を設けて行っている。学校図書館もそのような発信・交流の場となりえる。今後は写真を読み解く、図や挿絵を読み解く、表を読み解くなどの様々な読解力と絵や図や写真や数値や表で表現する力と表裏の関係で育成されていく方向にあり、学校図書館もその育成を担う役割がある。

9. おわりに

地図については帝国書院を、百科事典についてはポプラ社担当者をゲストに招き、情報更新の話もしてもらった。年鑑の利用、インターネットやデータベースの利用、情報カードの使い方、著作権についても今後は指導すべき課題と考えている。本校の情報リテラシー育成は、担任が行う学年のカリキュラムと図書館の持つ図書時間のゆるやかなコラボレーションで行われている。現在本校で行っている図書館利用指導は以下の通りである。

低学年 図書館利用になれる

請求記号を意識する

図鑑を使う

中学年 国語辞典・漢字辞典を使う

百科事典・地図を使う

目次と索引を使う

NDCのしくみを知る

公共図書館を利用する

高学年 情報源の確認

情報の更新の注意

博物館・美術館・郷土館などの利用日常のレファレンスでは、「それは3類、それは7類。」「環境は51だよ。」とまずはNDCで所蔵場所を案内するようにして、子ども自身の検索能力の育成を心がける。調べる過程を担任と見ながら、具体的な本を示して丁寧に援助すべきところは援助する。義務教育の終了する15歳の春には公立図書館が使えるような生涯教育へのバトンタッチが必要である。そのためにも学校教育では情報探索のスキルをはじめとする情報リテラシー教育は欠かせない。

昔は社会生活上最低の知識・技能として「読み・書き・ソロバン」といわれたが、今日の高度情報化社会では生活上「読み・書き・パソコン」といわれる。自ら見つけた課題や疑問について、どういうプロセスで解決していくかを学習する必要がある。そのような指導が必要である。『未来

の衝撃』（中央公論社1982）の著者A・トフラーは「明日の文盲とは、読むことのできない人のことではないだろう。それは学ぶ方法を学んだことのない人のことであろう。」と学び方学習の必要性を強調している。この〈学び方を学ぶ〉ことがすなわち情報リテラシーの育成なのである。学校教育において情報リテラシーを育成する初歩の一步として、図書館利用指導からが大切ではないか。どの教科・領域にも通用する力として、情報を探索するスキルを育成することや、情報を読み解く力を養う事が学校図書館で可能であることは実践からも明らかである。情報の統合と表現・交流に関しては教科領域の活動にあわせたサポートが可能である。学校図書館が読書センター・学習情報センターとして学校教育の中で機能する姿のひとつなのである。

注1. asahi.com./教育/教育制度・話題 <http://www.asahi.com/edu/news/TKY200708310171.html>

アクセス 2007. 9. 1

注2. 三輪真木子著『情報検索のスキル』中央公論社 2003 p.176

注3. 文部科学省/情報化の進展に対応した初等中等教育における情報教育の推進等に関する調査研究協力者会議「情報化の進展に対応した教育環境の進展に向けて」1998. 8 http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/002/toushin/980801e.htm#1-2 アクセス 2007. 9. 1

注4. Information Communication Technology

情報コミュニケーション技術

注5. 中山美由紀著/学習指導要領からみる学校図書館－教育の情報化の進展の中で－「図書館雑誌」98(5),2004.5,p276-277

注6. 中山美由紀著/よりよい協働めざして「学校図書館」No.642, 2004.4, p.57-60

注7. <http://www.u-gakugei.ac.jp/~kanesyo/> 本校ホームページ/教育活動/2泊3日の「至楽荘」

注8. 『ひろがる言葉 小学国語3上』教育出版 2005 p.54-57

注9. 『ひろがる言葉 小学国語4上』教育出版 2005 p.50-51

注10. 東京学芸大学附属世田谷中学校司書・村上恭子氏が図書委員会で、東京学芸大学附属世田谷小学校

司書・吉岡裕子氏が5年生で先行実践している。これらを踏まえて、附属小金井小学校で筆者が「100冊図書館をつくろう!」を提案した。

【参考文献】

1. ジェームス・E・ヘリング著 須永和之訳『学校における情報活用教育』日本図書館協会 2002
2. 堀川照代, 中村百合子編著『インターネット時代の学校図書館 司書・司書教諭のための「情報」入門』東京電機大学出版 2003
3. 山内祐平著『デジタル社会のリテラシー 「学びのコミュニティ」をデザインする』岩波書店 2003
4. 室伏武著『情報活用能力とその指導』第一法規 1998
5. 梅棹忠夫著『知的生産の技術』岩波書店 1969
6. 日本図書館協会利用教育委員会編『図書館教育ガイドライン合冊版: 図書館における情報リテラシー支援サービスのために』日本図書館協会 2001
7. 三輪真木子著『情報検索のスキル』中央公論社 2003
8. 菅谷明子著『メディア・リテラシー』岩波書店 2003
9. アメリカ・スクール・ライブラリアン協会・教育コミュニケーション工学協会編 同志社大学学校図書館学研究会訳『インフォメーション・パワー 学習のためのパートナーシップの構築』日本図書館協会 2000
10. 東京都高等学校図書館研究会編『学び方の技術—高校生の図書館利用法』日本書院 1978
11. 東京都小学校図書館研究会編『新しい図書館; 学ぶ力を身につけるために』第一法規 1982
12. 袖ヶ浦市教育委員会編『袖ヶ浦小学校 学び方ガイド』袖ヶ浦市立総合教育センター 2002
13. 片岡則夫著『クックとタマ次郎の情報大航海術』リブリオ出版 2001. 7
14. 堀田龍也・塩谷京子編『学校図書館で育む情報リテラシー—すぐ実践できる小学校の情報活用スキル』全国学校図書館協議会 2007
15. 鎌田和宏著『教室・学校図書館で育てる小学生の情報リテラシー』少年写真新聞社 2007
- 3) 菅原春雄著/利用教育を実施してみても; 文献探索法「短期大学図書館研究」第16号 1996 p.31-39
- 4) 森洋三著/学校図書館メディアリテラシー「学校図書館」No.617, 2002.3 p.18-20
- 5) 菅原春雄著/情報リテラシー教育と学生の反応; 文献探索法の講義から「文教大学教育学部紀要 第38集」2004.12 p.129-136
- 6) 菅原春雄著/図書の分類の意義と配架について「学校図書館」No.666 2006.4 p.34-36

【雑誌論文】

- 1) 菅原春雄著/学び方教育の推進について「図書館科学会年報」昭和59 1983, p.9-13
- 2) 菅原春雄著/図書館活用法; 学習の基礎「文教大学女子短期大学部研究紀要」第39集 1995.12 p.67-77